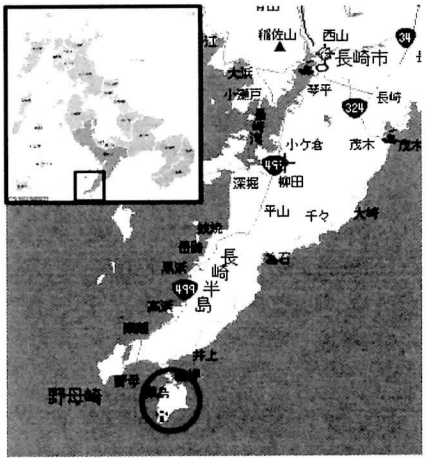
漁業の灯を絶やさない
～ 漁業後継者育成と地域活性化 ～

樺島一本釣振興会
牧 裕貴

１．地域の概要

長崎市野母崎樺島町は、長崎半島の南端に位置し「樺島大橋」によって陸続きとなってからは、長崎市内から車で約１時間の距離となったが、世帯数３３８、人口７４７人の過疎化が進む「島」である。



２．漁業の概要

樺島では一本釣りをメインに、刺し網漁業、「からすみ」の水産加工業などが営まれている。なお、所属する野母崎三和漁業協同組合の組合員はは正准合わせて４９１名で、生産量約４，４００トン、生産金額は約１８億円である。

３．振興会の組織と運営

活動の主体となる「樺島一本釣振興会」は、会員相互の親交,技術向上を主な目的に活動しており、最近では「イシダイ釣り試験操業」など、生産や所得に繋がる活動に取り組んでいる。

４．研究・実践活動取組課題選定の動機

漁業収入の安定を図るため、平成１２年から漁協と行政、振興会が一体となり、釣りアジのブランド化に取り組み、ブランド魚「野母んあじ」が誕生した。

野母んあじの規格は一本釣りで漁獲される全長２６ｃｍ以上、体重３００～５００ｇの肉厚で脂の乗った瀬付きのアジとしており、魚体を扱う際にも一切人の手が触れないというこだわりを持っている。他にも「船上」「水揚げ時」「出荷時」と３段階にわたり選別を行い、高い品質を保っている。こうしてブランド化に成功した「野母んあじ」は、現在キロ3,000円で取り引きされ、規格外アジの約２倍の単価となっている。

この「野母んあじ」のブランド化により、アジの価格向上は何とか図られたものの、苦労してブランド化に成功したアジを漁獲する、肝心の振興会会員は減少の一途をたどり、平成５年には３０名いた会員も、平成１５年には９名と減少した。このまま樺島一本釣振興会の漁業者が減れば、それに伴って「野母んあじ」の生産量も減少し、せっかくブランド魚として育て上げた「野母んあじ」の安定供給ができなくなることで将来の発展も見込めないという、危機感が生まれた。こうして漁業後継者を育てる必要性を感じ、研修生の受け入れに取り組むこととなった。

5．研究・実践活動状況及び成果

（1）選考

研修希望者とは面接を行い、その内容をもとに振興会で選考会を開き研修生を決定した。

（2）受け入れ体制

一口にアジの一本釣りといっても会員の数だけ漁法に特徴がある。１人で漁に出る船もあれば、数人で操業する船もあるし、使う漁具も人により異なる。そこで、色々な人のもとで勉強をし、自分なりの漁法を確立できるように、研修生が違う船を周期的に渡り歩ける体制をとった。

まず、研修生に対し、それぞれの「師匠」を決める。「師匠」は期間を通して研修の責任者となる。一定期間は「師匠」の船に乗り基礎を身につけるが、そのあとは基本的に一つの船に一週間を目安として、違う船頭の指導を受けるといった形である。

（3）研修内容

漁獲に必要な漁具の作成方法を始め、操船技術や一本釣り技術の習得はもちろんのこと、魚群探知機やＧＰＳの使用法、餌作りや漁場利用のためのポイント探し、さらにはアンカーの打ち方及び回収方法に至るまで事細かく指導している。

また危険な作業やさまざまなトラブルの回避・対処法等については、特に丁寧に指導している。

（4）その他

漁業指導にとどまらず、生活面でも地域全体で研修者をバックアップしている。

例えば研修者が共稼ぎである場合、親に変わって研修者の子供を保育所まで迎えに行ったり、ご飯のおかずをお裾分けしたりということもある。

住居についても、持ち主が自費で廃屋を直し格安で研修者に提供したりと、地域全体で研修生を迎え入れている。

（5）成果

これまでに、１３名の研修生を受け入れ、うち７名が地元に漁業者として定着した。更にその中の６名は船を購入して独立し、樺島一本釣振興会会員となっている。

このことにより、取り組みを始めて４年目を迎える平成１９年現在、振興会のメンバーは９名から倍近い１５名に増えた。また現在独立を果たした研修生は教える側の人間にまで成長し、すすんで「師匠」となってくれている。

6．波及効果

島で一つの保育所である「樺島保育所」の園児は９人であるが、このうち３人が振興会メンバーの子供達である。そのほか、地域のイベント（灯台まつり、公民館まつり、町民体育祭、ペーロン大会）や伝統行事（ヒューコチャンチャン）、消防団活動や自治会活動等へ積極的に参加しており、漁業研修生の定着による野母崎樺島の活性化が図られている。

7．今後の課題や計画と問題点

（1）課題

①住居の確保

樺島には空き家が少なく、あっても改修費用にかなりの額を要する物件が多いため、研修生が住居を確保するにあたり苦慮する事態が発生している。

②研修期間中の研修生の経済的負担

アジ一本釣り技術は、通常独り立ちを可能とするレベルに達するまで少なくとも２年ぐらいは掛かると言われている。しかし、実際の研修期間は行政の支援策の制限もあり、長くても１年で、短い時には１ヶ月であった。

このため研修期間終了後、技術習得を目指す研修生は無給で研修を継続するしかなく、その間の生活は自己の貯蓄等に頼らざるを得ない状況となっている。また独立のための船や機材の購入資金の問題も当然生じてくるため、今までの研修生の中には、資金面で独立を諦め樺島を去っていった者も少なくない。

こうしたことから、これまで研修生受け入れの選考ポイントとして第一に上げていたのは、独立までを可能とする経済的余裕を持っているかどうかであった。しかし４年間の取り組みを振り返ってみて感じるのは、経済的余裕さえあれば良いというものではないということである。

地域を愛し地域からも愛される、そういった形で漁業就業に至らなければ、本当の意味での「地元の漁業者」にはなれない。最終的には、「漁業への想い」や「周囲との協調性」といった、その人の「人間性」がやはり一番大事ではないか、と再認識している。

一本釣り振興会として後継者を育てるということは重要な問題である一方、沿岸漁業の性質上、新規就業者を受け入れるということは、限られた資源・漁場を共有するライバルを作り出すことになる。それでも樺島一本釣り振興会は漁業後継者を育成する道を選んだし、今後も前向きに取り組みを検討したいと考えている。

研修生も、受け入れる側のそうした想いに敬意を払い、「自分が本当に漁業を生涯の仕事としたいのか」「受入地が好きになれるのか」を真剣に考え、研修に臨むべきであろう。